

ステータスの証としての銃乱

火縄銃は単なる武器ではなく、富や権力の象徴、あるいは芸術品として扱われることもあった。

16 世紀の内乱期から、徳川時代の比較的平和で安定した時代になると、戦争用具としての必要性は低下した。幕府は自国の武器庫に鉄砲を必要としたが、外部での鉄砲の製造や所有には厳しい制限を課した。

火縄銃は単なる武器ではなく、富や権力の象徴、あるいは芸術品として扱われることもあった。

16 世紀の内乱期から、徳川時代の比較的平和で安定した時代になると、戦争用具としての必要性は低下した。幕府は自国の武器庫に鉄砲を必要としたが、外部での鉄砲の製造や所有には厳しい制限を課した。

その結果、火縄銃は身分の象徴となった。武士の長刀と短刀のように、あるいはヨーロッパの貴族の刀のように、優雅に作られたマスケット銃は、権力と階級の象徴となったのである。また、有力者は自宅や屋敷に銃を飾り、鉄砲鍛冶は装飾を目的とした精巧な作品を製作するようになった。

マスケット銃に施される装飾には、銃身やカラクリの刻印、金・銀・真鍮を象眼した銃床などがある。また、花柄のデザインも人気があり、所有者や製造者の名前が刻まれたものも多い。